

株式会社ユウワ主催

海外インターンシップ[°]報告書

小目次

1. はじめに
2. ベトナムでの体験 1 日目
3. ベトナムでの体験 2 日目
4. ベトナムでの体験 3 日目
5. ベトナムでの体験 4 日目
6. 4 日間を通して学んだこと
7. これからの日本
8. 最後に

1. はじめに

2025年9月8日から9月12日にて行われた株式会社ユウワベトナム様のインターンシップにおいて、どのようなことを行い、どんなことを学んだのかについて報告する。

2. ベトナムでの体験 1日目

9月8日の14時頃にホーチミンのタンソンニヤット国際空港に到着した。空港を出たすぐの道路では交通量の多さと、車のクラクションの騒がしさに驚いた。日本ではクラクションを鳴らす事は珍しいことだが、ここでは相手に自分の存在を伝えるためにむしろ鳴らす方がいいと言う感覚だそう。空港からそのままホテルへ向かった。ホテルまでは空港から1時間ほどの経路であり、栄えている地域から工場地帯までみることができた。以下にベトナムの風景を示す。

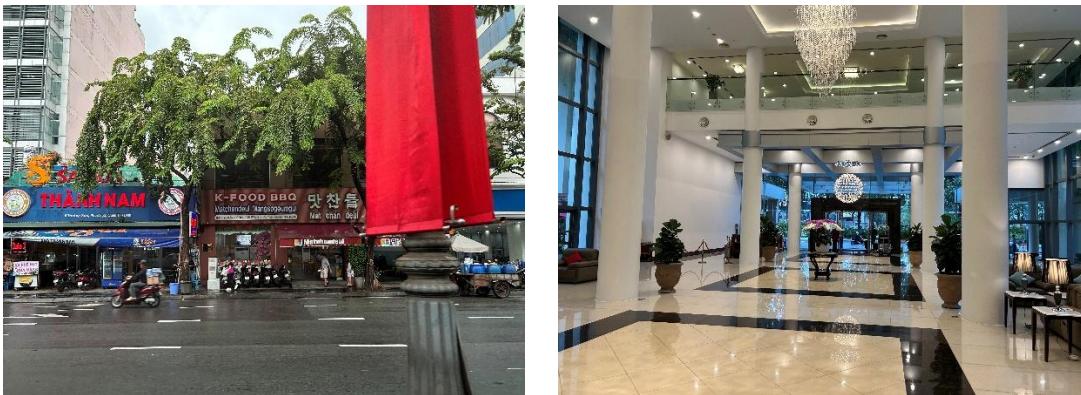


図 1, 2 ベトナムの道路、ホテルロビー

移動中にみた風景から感じたことは自動車よりもバイクの方が多いことや、インフラがまだまだ整っていない箇所が多いことだ。日本に比べてバイクが多い理由としてベトナムでは雪が降らないのでわざわざ車を購入しなくてよい事、また、公共交通機関がまだまだ発展していないため個人の交通手段として車より低価格で燃費の良いバイクが選ばれるという事がある。

夕食では Hikari 4Ps でイタリアン料理を食べた。今回同行するメンバーはインターンシップの学生4人と、株式会社ユウワさんの内定者5人と引率の社員さん2人、ユウワベトナムの日本人社員さん1人の計12人である。この日の夕食はこれに加えてユウワベトナムのベトナム人の社員さん1人も一緒に食事した。ホテルのすぐ近くのレストランだったため観光客がよく来ることを想定しているようなサービスが整っていた。それぞれの自己紹介を終えてから会食でたくさんコミュニケーションをとり、今自分が海外のインターンシップに参加しているという実感が湧いたような気がした。ホテルに帰ってからは明日に

備えて早めに就寝した。部屋にあるトイレや、店のトイレではトイレットペーパーをそのまま流すのではなく、すぐ隣にあるゴミ箱に捨てることを気にかけて行った。これはベトナムの下水のパイプ技術の問題であり、日本のようにトイレットペーパーを流してしまうと詰まってしまう可能性があるためである。

3. ベトナムでの体験 2 日目（工場見学）

9月9日、ユウワベトナムの工場を実際に見学した。以下にその様子を示す。

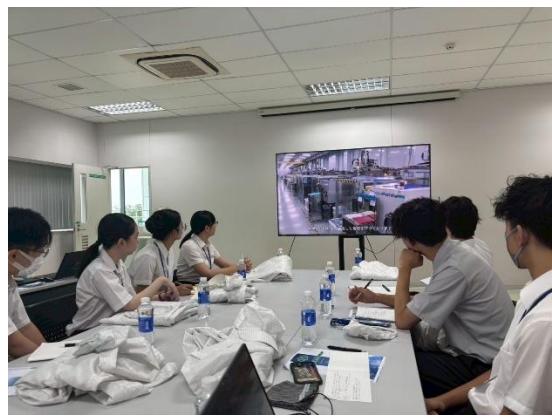


図3 ユウワベトナムの工場内見学

ユウワベトナム工場では長野県で見学したユウワの工場と比べて規模が非常に大きく、さらに設計から製造までを一貫して管理している点が特徴的であった。その背景の一つには、ベトナムの人工費が比較的低いことがある。加えて、ベ

トナム人は日本人と同様に手先が器用であり、作業の種類によっては生産性が日本を上回る場合もあるという。つまり、ユウワの戦略として、日本で多くの人材を雇うよりも、ベトナムで人員を確保した方が総合的なコスト削減につながる。実際にユウワをはじめとする数多くの外資系企業がベトナムに進出しているのは、こうした利点を重視しているからだと理解できた。

ユウワベトナムを訪れた際にまず驚いたのは、徹底された生産管理体制である。工場内の温度や湿度、クリーンルームの環境基準、従業員の作業内容や体制に至るまで、細かく調整されており隙が感じられなかった。日本で培った高度な技術をベトナムでも同等に再現する工夫が随所に見られた。

また、効率化を強く意識していることも印象的であった。設計部門と顧客対応の部屋を同じ場所に配置する工夫、複数の部品を組み立てる際の時間管理、さらには欠品が発生した際の対応を迅速化するために生産ラインを明確化してベトナム人が分かりやすいようにするなど、最大限の成果を引き出すための仕組みが整えられていた。

一方で、日本の工場と比較して驚いたのは、自動化があまり進んでいない点である。長野県内の工場ではロボットや自動機械の導入が進んでいたが、ベトナムでは人の手作業が多い。理由は、人件費が安いため、機械を導入するよりも人を使う方がコストを抑えられるからであるが、近年ついにベトナムの人件費よりも自動化する機械を導入するほうが利益増加につながるような経済状況にあると教わった。これを聞いて感じたことは、日本にだけ拠点を置く企業に比べて国内はもちろん、世界的な経済状況について非常に敏感に情報を得る必要があると感じた。実際に、コロナウイルスやドイモイ政策の影響を受けた日系企業も多数あるという。

昼食は工場内の食堂で食べさせていただいた。観光客向けのレストランとは異なり、本場のベトナム料理を食べることができた。以下に画像を示す。



図4 工場内の食堂のベトナム料理

3.2 FYMV, FCV 工場見学

次に富士フィルムとユウワベトナムの合弁会社 FYMV (Fuji Film Yuwa Medical Vietnam) を見学した。日本では富士フィルムといえばカメラのレンズのイメージが強いが、実際にはカメラ関係の売上は2割であり、レンズの制作で培ってきた塗布・成膜などの高い技術力を用いて現在では医療製品にシフトしているという。ここではベトナムで実際に働くことに関する苦労や日本で働くことの違いについても質疑応答を行って知ることができた。ローカルスタッフと働く上でやはり言語の壁があるため、日本の高い技術力を上手く製造業に生かすために様々な工夫があつてとても感動した。

次に、FCV(Fujikura Conec Vietnam)の工場に訪れた。

ここではユウワベトナムで作ったプラスチック製品にプレス機を用いて端子をインサートする成形をや、メッキを多品種少量生産するような製造工場である。生産ラインは合計43ラインあり、その内訳として、15ラインが自動ライン、26ラインが手動ライン、2ラインがセミオート（半自動）であった。まだまだ手動ラインが多いが自動ラインの増加に投資する方向で進んでいるという。また、なぜセミオートのラインを残しているかは、製造工程の多いものを製造する際に自動化させるには工程が多すぎたり、手動にしては人が工程を覚えるコストの削減や、工程が多いためヒューマンエラーが多くなることを防ぐという目的があるそう。この工場見学でもやはり製造業の工場はベトナム人の安い人件費を使うよりも自動化するほうがメリットがおおきい傾向にあるということを知る。日系企業が海外進出するメリットとして人件費の安さが一番のメリットだったが自動化技術の向上に伴ってこのようなマーケティングの戦略が衰退していくようだと考えた。



図5 FMYV

4. ベトナムでの体験 3 日目

9月10日、まず訪れたのは HUTEC 大学というベトナムの大学である。校内を見学したところ、大学は平日であったが、大学のバンドサークルがライブをしていたり、とても賑やかな印象をうけた。見学を行った後、大学内で私たちインターン生が現地の学生に向けてスピーチと質疑応答を行った。以下にその様子を示す。



図 6 スピーチの様子と HUTEC 大学

4.1 HUTEC 大学訪問

スピーチでは自己紹介や日本の文化についての紹介、自分が大学で専攻している分野についての紹介を行った。私は機械分野の設計技術関係についてのスピーチを行ったところ、HUTEC 大学で日本語を学び、将来は日本でエンジニアとして働きたいという HUTEC 大学院の学生から、設計技術の日本企業についての質問を受けてすごく戸惑ったが、日本での様々な企業のインターンシップの経験があったためその経験を話すことで質問に辛うじて答えることができた。

日本とベトナムでは物価の差が大きいため、ベトナムで日本語を学び、日本で出稼ぎすることで、ベトナム国内で同じように働くよりも多くの収入を得ることができる。HUTEC 大学の学生にはそのような考え方で日本語の資格を取得したり、日本の大学に留学したりしてとても精力的な学生が多くいた。私も海外インターンシップに参加したこのような経験を活かした就活を心がけようと考えるようになった。

4.2 ランドマーク 81

次に訪問したのはランドマーク 81 である。ホーチミン市にあるランドマーク 81 はベトナムで最も高い建築物であり、地上 81 階・高さ 461.2 メートルを誇

る。実際に目の前に立ったとき、その圧倒的なスケール感に驚かされるとともに、近代化が急速に進むベトナムの象徴的存在であると感じた。

館内には高級ホテル、商業施設、展望台、さらには高級レジデンスまでが備わっており、単なる高層建築ではなく、都市の機能を一体化した複合施設として設計されている点が印象的であった。特に展望台からはホーチミン市の街並みを一望でき、バイクが縦横無尽に走る道路や高層ビル群、サイゴン川の流れなど、急速な都市発展と生活の活気を実感することができた。

この訪問を通して、ランドマーク 81 は単なる観光名所ではなく、経済成長を遂げるベトナムの姿そのものであると感じた。高層ビル建設には建築技術だけではなく、都市計画やインフラ整備、さらには多様な人々の利用を想定したデザインが求められる。今回の見学は、ベトナムにおける国際的な競争力の高まりや、日本とは異なる都市発展のあり方について考える貴重なきっかけとなった。



図 7 ランドマーク 81 風景

5. ベトナムでの体験 4 日目

5. 1 VSIP 事務所訪問

VSIP とはベトナムの工業団地の運営、管理を行う日系企業であり、ユウワベトナムの工場をはじめとした、製造業の工場を設置したい企業に土地を売っている。日本では工業団地のような広大な土地を管理するのは行政機関であるが、ベトナムでは企業と行政機関が協力して土地の管理をすることができるそうだ。VSIP で売っている土地の総面積は現在約 12.047 ヘクタール（東京都千代田区 12 個分）という日本では考えられない規模の話で驚いた。

製造業以外の企業にあまり詳しく理解がなかったため、企業説明の後に様々な質問を投げかけた。ベトナム以外の国、主に東南アジアの事業展開についてや、日系企業の進出状況、企業の利益の面に関する話もとても細かに、学生にもわかりやすく解答をしてくださった。特に印象に残った話題として、カントリーリスクという話があった。近年、多くの日本企業がベトナムに進出しているが、

その際に考慮しなければならないのがカントリーリスクである。カントリーリスクとは、進出先の政治・経済・社会状況の変化によって企業活動に不利益が生じる可能性を指す。ベトナムの場合、政治的には社会主義体制のもとで安定しているとされる一方、法制度や規制が急に変更される可能性があり、企業にとって予期せぬ影響を及ぼすリスクが存在する。実際にベトナムでは省（日本でいう県）の合併により所属省庁が変わるために、従来の担当者・窓口が消滅するケースがあるという。

さらに、為替変動やインフレ率の上昇、人件費の将来的な高騰も企業収益に影響を及ぼす要因となり得る。それでもなお、多くの企業がベトナムに進出するのは、労働力の豊富さや市場の拡大可能性といった魅力がリスクを上回ると判断しているからである。したがって、ベトナムで事業を展開する際には、こうしたカントリーリスクを十分に認識した上で、リスクマネジメントを徹底することが求められる。話をしてくれた VSIP の日本人社員の方はとても敏感にベトナムの経済、日本の経済の状況を毎日チェックしているという。経営者の立場になることの責任感を肌で感じるような貴重な話が聞けて良かった。



図 8 工業団地の模型、VSIP ロビー

6. 4 日間を通して学んだ事

この 4 日間を通じて得られた知見を文化的側面、経済的側面、そして海外就労に関する考察の 3 つに分けてまとめる。

6. 1 文化的側面

研修中に訪れたベトナム戦争博物館は、ベトナムの歴史と人々の生活を深く理解する大きな手がかりとなった。館内には戦闘機や戦車といった実物の兵器が展示されており、当時の戦闘の激しさを生き生きと伝えていた。以下に博物館の写真を示す。



図 9 ベトナム戦争博物館

また、枯葉剤被害を受けた人々の写真や生活用品の展示からは、戦争が市民生活に与えた甚大な影響が実感できた。特に印象的であったのは、子どもたちや一般市民が戦争の犠牲になった事実を強く訴えかける展示であり、戦争の悲惨さと平和の尊さを改めて考えさせられた。これが 1975 年までの出来事であることは恐ろしいと感じた。

さらに、街並みや食文化からも文化的特徴を感じることができた。ベトナム料理には薬味やハーブが多用されており、フォーや生春巻きといった代表的な料理を通じて、食文化が日常生活の中で大切にされていることを理解した。また、街全体の雰囲気には中国文化の影響が色濃く残っており、雑多で活気あふれる市場や旧正月（テト）を重視する習慣などからも、そのつながりを強く感じた。また、企業に訪問するなかでどの職場にも女性が働き手として多いことに驚いた。ベトナムでは女性が働き手として一家の大黒柱になることが多いそうだ。

6. 2 経済的側面

経済面において特に印象的だったのは、ベトナムが社会主义国家でありながら資本主義的な仕組みを積極的に取り入れているという点である。例えば、ホーチミン市にはランドマーク 81 をはじめとする高層ビルや大型商業施設が立ち並び、近代的で活気ある都市の姿が見られた。これらは海外資本の導入や経済開放政策「ドイモイ」によって実現されたものであり、急速な発展を物語っている。

郊外や農村部に足を運ぶと、未だに道路や排水処理、鉄道といったインフラが十分に整備されていない現状も確認できた。このことから、都市部の発展と地方の遅れとの間に大きな格差が存在することがうかがえた。ベトナム経済が抱える課題を実感した。

社会主义の理念として「平等な社会の実現」が掲げられている一方で、資本主義的な自由競争を取り入れることにより、貧富の格差が広がる可能性がある。このような「社会主义と資本主義の共存」がベトナム経済の特徴であり、今後の発展の方向性を考えるうえで重要な視点であると学んだ。

6. 3 海外就労

今回の研修では、現地の工場やオフィスを訪問し、働き方の違いについても学ぶことができた。特に印象的だったのは、労働環境や価値観の違いである。例えば、ベトナムの工場では人件費が日本に比べて低いため、自動化機械よりも人の手による作業が多く導入されている。効率化を図る工夫は随所に見られるものの、「人の力を活かす」という考え方方が根強く残っており、日本の自動化重視の現場とは対照的であった。海外で働くには単に日本のやり方を押し付けるのではなく、現地の文化や価値観を尊重しつつ協働する柔軟性が不可欠であると理解した。

まとめとして、今回の4日間の研修は、単なる観察にとどまらず、ベトナムという国を「歴史」「経済」「文化」の3つの視点から総合的に学ぶ貴重な機会であった。ベトナム戦争博物館での学びを通じて平和の重要性を再認識し、社会主義と資本主義が共存する独自の経済モデルからは今後の発展の可能性と課題を学んだ。また、現地で働く人々との交流を通して、海外で働く際に必要な姿勢や考え方についても理解を深めることができた。

7. これからの中日本

今回のベトナム海外インターンシップを通じて、日本企業が今後どのような姿勢で国際展開を進めるべきかを考える機会となった。特に、ベトナムのように急速に経済成長を遂げている新興国との関わり方は、日本企業の持続的な発展に直結する重要な課題である。

第一に、人材戦略の再構築が必要である。ベトナムでは若年層人口が豊富であり、労働力の確保が容易である一方、日本は少子高齢化が進んでいる。この差を考慮すれば、日本企業は積極的に海外人材を登用し、現地での教育・研修制度を整備することが不可欠である。単なる労働力の調達ではなく、現地の人材を「パートナー」として育成することで、企業の国際競争力を高めることができる。

第二に、現地ニーズに対応した柔軟な経営が求められる。新興国市場では、日本の標準化された製品やサービスがそのまま受け入れられるとは限らない。価格や機能に対する要求は国ごとに異なり、ベトナムでは「高品質でありながら低価格」というバランスが重視される傾向にある。日本企業は、品質至上主義を維持しつつも、現地市場に適応した製品開発やサービス設計を進める必要がある。

第三に、技術力を活かした現地貢献の姿勢を持つべきである。日本企業は高い生産技術や品質管理力を有しているが、それを単に国内にとどめるのではなく、現地工場やパートナー企業と共有することで信頼関係を築くことができる。環

境技術や省エネ技術など、日本が得意とする分野は、新興国の持続的成長に大きく貢献できる領域であり、ここに積極的に投資していくことは日本企業にとっても長期的な利益になると考える。

最後に、リスクマネジメントの強化が重要である。新興国市場には制度変更や政情不安といった「カントリーリスク」が存在する。こうした環境下で安定した事業運営を行うためには、複数国への分散投資や現地政府との関係構築、さらにはサプライチェーン全体の再設計が欠かせない。

総じて、日本企業は海外市場を単なる販売拠点として捉えるのではなく、現地と共に成長する姿勢を持つことこそが、これから日本経済を支える鍵になると考える。

8. 最後に

今回行われた海外インターンシップにおいて、株式会社ユウワ様、忙しい中で現地での案内や手続き等を行っていただいた社員の皆様、訪問した企業の皆様、本当に私の人生にとって貴重な体験をさせていただき誠にありがとうございます。この素晴らしい経験を有意義に活用し、日本にとどまらず海外でも活躍できるような人材になろうと思います。